

巨大ナル唾石症ノ一症例

高 岡 市

堀 謙 三

Kenzo Hori

(昭和16年11月19日受附)

目 次

緒 言
症 例
考 察

結 論
文 獻

緒 言

唾石ハ古來稀有ナル疾患ニ非ズ。從來幾多ノ文獻ニヨリ、殆ド述ベ盡サレタル感アルモ、余ハ最近無症狀ニ経過セル、顎下腺實質内ニ介在セリト思惟セラル、巨大ナル唾石ノ一症例ヲ

經驗シタルヲ以テ、二三興味アル知見ヲ得茲ニ其ノ概要ヲ記載シ、先人ノ報告ニ追加セント欲ス。

症 例

患者 山○節○, 27歳, 男, 漁師,
富山縣水見町。

既往症 生來強健ニシテ著患ヲ知ラズ。

現病歴 數年前ヨリ左側第1, 第2大臼齒部ノ内側ニ於テ、齒齦粘膜ノ腫脹アリシモ、障碍ヲ感ズル程度ニ非ザリシカバ、放任シ居リシニ、數日前ヨリ腫脹増大シ、同時ニ該部口腔底ニ異物感アリ、更ニ2, 3日経過セルニ、腫脹部上端ニ於テ、小豆大ノ固キ異物ヲ觸知スルニ至レリト診テゾフ。

主訴 左側口腔底ノ異物感。

現症 體格榮養共ニ良好、胸腹部臟器ニ異狀無シ、口腔底ヲ檢スルニ、左側第1, 第2大臼齒ノ内側ニ當リ、約小豆大ノ灰白色、稍固キ物質ノ露出セルヲ認ム。其ノ周邊輕微ノ發赤、腫脹ヲ呈スルモ、疼痛ヲ訴ヘズ。耳鼻咽喉部ニハ著變ヲ認メズ。

以上ノ所見ヨリ唾石ト診斷シ、小切開ヲ施シ露出セル異物ノ先端ヲ鋭匙鉗子ニテ摺ミ、輕ク動搖セシメツ

ツ牽引セルニ、容易ニ抽出シ得タリ。更ニ内部ヲ窺フニ小唾石ノ存在ヲ認メ是ヲ抽出ス。創面ハ「トリパフラビン」ニテ消毒シ、含嗽ヲ命ジタルニ、數日ニシテ創面ノ治癒ヲ認メタリ。

唾石肉眼的所見

唾石ノ大キサハ $2.35 \times 1.75 \times 2.50$ ニシテ重サ $4.6g$ 不正形ノ塊狀ヲナシ、灰黃白色表面凹凸不平ニシテ粗糙ナリ。之ヲ細線鋸ニテ分割シ、剖面ヲ研磨觀察スルニ、核ノ如キ部アリ、之ヲ中心トシテ、恰モ樹木ノ年輪ノ如ク淡褐色ノ輪狀ノ線ヲ認メ得。

唾石ノ分析所見

分割セル半分ノ唾石ニ就キ成分ヲ分析セルニ次ノ如シ。

| | |
|-------|--------|
| 水 分 | 6.21% |
| 有 機 質 | 13.69% |
| 灰 分 | 80.10% |
| 灰 分 | 100分中 |

{ 磷酸カルシウム $\text{Ca}_3(\text{PO}_4)_2$ 90分
 其他炭酸カルシウム CaCO_3
 硫黄ノ微量ヲ認ム

考 察

唾石ニ關スル文獻ハ遠ク Hippokrates = 始マルト稱セラル、モ Speichelstein ナル名稱ノ下ニ發表セラレタルハ 173 年 Scherer ノ記載ヲ以テ嚙矢トシ、以來本症ニ就キテノ報告ハ枚舉ニ遑無キ状態ナリ。且ツ又多數症例ニ就キテノ統計的觀察モ、先人ニヨリ有意義ナル業績トシテ發表ヲ觀ル。

最近太田氏ハ昭和 11 年ヨリ 15 年ニ至ル本邦文獻 72 症例ニ就キ統計的觀察ヲ行ヒ、次ノ如ク報告セリ即チ、

1) 年齢 30—40 歳 18 例ニシテ最高ヲ示シ、21—30 歳 16 例、41—50 歳 10 例ニシテ之ニ次グ、即チ壯年者ニ於テ多數ニ發見セラル。

2) 性別。男子 43 例、女子 21 例、不明 8 例ニシテ男子ハ女子ノ約 2 倍ヲ示ス。

3) 部位。ワルトン氏管並ニ顎下腺 92.8% バルトリニ氏管並ニ舌下腺 4.3% ステノン氏管並ニ耳下腺 2.9% ヲ示シ、ワルトン氏管及ビ顎下腺唾石症ガ其ノ大部分ヲ示ス。而シテ唾石ハ腺體內ヨリモ排泄管ニ頻發スト。

4) 側別。左側 31 例、右側 26 例、不明 15 例。

5) 肉眼的の所見。大キサハ粟粒大、米粒大ヨリ小豆大ノモノ最モ多ク、形態ハ球狀、橢圓形、紡錘形ノモノ最モ多ク、棍棒狀ノモノ之ニ次ギ、其ノ他ハ種々雜多ナリ。

6) 主訴。食事中或ハ食後ノ唾仙痛、壓迫感、腫脹嚙下痛等。

7) 局所症狀。大部分ハ唾液腺、排泄管、或ハ腺ノ中心トセル腫脹、壓痛、結石觸知等。

余ノ症例ハ 27 歳ノ男子ニシテ、左側顎下腺實質内ニ介在シ、其ノ増大ト共ニ口腔底ニ露出シ來レルモノト思考サレ、長年月間無症狀ニ經過シ、且ツ著シキ局所症狀ヲ呈セズ經過セルモノニシテ、文獻例ニ參照シ興味深キモノアリ。又腺體內ノ存在モ比較的稀ニシテ、太田氏ノ統計

ニヨルモワルトン氏管並ニ顎下腺唾石症 64 例中 8 例ヲ存スルニ過ギズ。

而モ其ノ重量ハ 4.6gr ニシテ(硬度 2.5 度)、最近十數年間ニ報告セラレタル文獻ニ徵スルモ宮城氏ノ 4.9gr ニ次グモノニシテ唾石中最モ巨大ナルモノト思惟ス。

次ニ本症ノ成生機轉ニ就キ考察セシニ、從來唾石症ノ成因ニ就キテハ炎症說、細菌說、潑溜說、體質說、新陳代謝障碍說、外傷說、化學說等甲論乙駁未ダ歸一スル所ヲ知ラズ。

深江氏ハ結石ノ化學成分ヲ分析シ、之レニヨリテ其ノ發生機轉ヲ檢索シ次ノ如ク論ゼリ。

1) 唾液ガ磷酸乃至炭酸石灰ノ析出ニ對シ、適當ナル水素イオン濃度ヲ有スルコト。

2) 分泌液中ニ於ケル鹽類ガ過飽和状態ニ在ルコト。

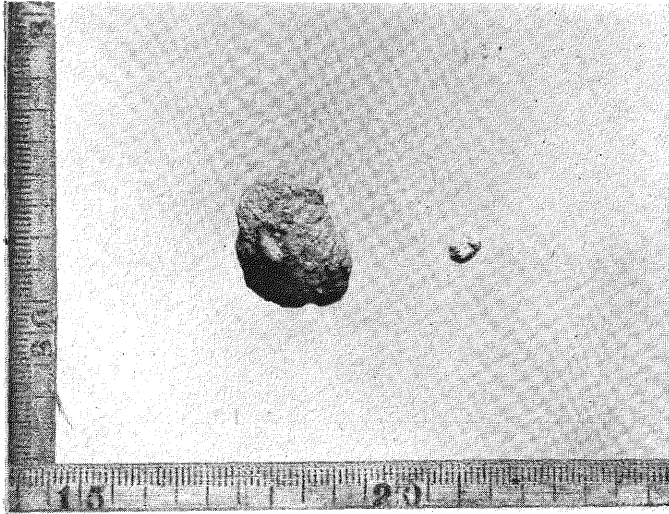
3) 唾液中ニ存スル粘素ハ磷酸石灰、炭酸石灰ノ析出ニ對シテ強キ保護作用ヲ有ス。此故ニ過飽和状態ニアル之等鹽ノ析出ヲ促スニハ當然粘素ヲ破壊セザルベカラズ。

4) 析出シタル鹽類ニ對スル種子ノ存在ヲ要スルコト、即チ結石核ノ存在ヲ要ス。

余ノ分析成績ハ前述セル如ク灰分 100 中磷酸カルシウム 90%、他ハ炭酸カルシウム及ビ微量ノ硫黄ナリ。深江氏ハ 3 例ノ唾石(重量) 0.550 gr, 0.0834g, 0.6023g) ニ於テ磷酸カルシウム 82.0%—84.2%、炭酸カルシウム 2.5%—3.1%、有機物 5.7%—7.4% ト記載セリ。即チ余ノ症例ニ示セル所ニ略一致シ、其ノ主要成分ハ磷酸カルシウムナルガ如シ。

而シテ余ノ一臨床例ヲ以テ其ノ成因ニ就キ言及スルハ甚ダ躊躇スルモノナルモ、余ノ唾石ノ中心ニ核様物質ノ存在スルコトヨリ、先人ノ強調セル如ク、結石ノ一條件トシテ核ノ存在ヲ必要トスル事ヲ首肯シ得、余ノ材料ニ於テハ核ノ

堀 論 文 附 圖



唾石割断面 (實物大)

性質ニ就キ明ラカニスルヲ得ザリシモ、從來稱セラル、如ク、一ツハ眞性核、即チ磷酸石灰石ニ對シテハ磷酸石灰石ノモノ並ニ之ト同型結晶質、他ハ偽核ニシテ小木片、魚骨、齒石等ノ小異物ニシテ排泄管孔ヨリ侵入シテ核トナリシモノナリ。何レモ核ノ存在アリ此レニ諸種ノ條件

備ハルニ及ビ「カルシウム」ノ析出ヲ生ジ、余ノ結石剖面ニ觀ルガ如キ年輪狀ノ結石状態ヲ形成シ、唾石ノ増大ヲ來スモノト思考セラル。即チ唾石ノ成立ニハ核ノ成立→唾液成分ノ變質→核周圍ノ石灰沈着→結石形成ナル順序ヲ必要トスルモノノ如ク思惟セラルベシ。

結 論

1) 余ハ27歳男子ノ左側顎下腺ニ介在セル唾石症ノ一症例ヲ經驗セリ。

2) 唾石ノ大キサ $2.35 \times 1.75 \times 2.50$ 、其ノ重量 4.6g、硬度 2.5度ニシテ從來報告セラレタルモノノ中、極メテ巨大ナルモノノ一ナリ。

3) 化學的分析ニヨリ、水分 2.21%、有機物 13.69%、灰分 80.10%ニシテ、灰分中約90%ノ「磷酸カルシウム」ヲ含有シ、殘餘ハ「炭酸カルシウム」及ビ微量ノ硫黃ナリ。

4) 唾石症ノ成立ニハ核ノ存在→唾液成分ノ變質→核周圍ノ石灰沈着→結石形成ナル一過程

ヲ必要ト思惟ス。

本症例要旨ハ昭和16年10月大日本耳鼻咽喉科會北陸地方會第56回例會ニ講演セルモノニシテ松田教授開講10周年ヲ記念セシ爲執筆セシモノナリ。

撰筆スルニ臨ミ御懇篤ナル御指導ト御校閲ヲ賜ハリシ金澤醫大耳鼻咽喉科教室松田教授ニ深甚ナル謝意ヲ表スルト共ニ唾石分析ノ勞ヲ願ヘシ金澤醫大附屬藥學專門部助教渡邊榮吉氏及學友豐田博士ノ御助言ニ對シ感謝ス。

文 獻

1) 只木良信、唾石ト口腔底化膿症ニ就テ。耳鼻咽喉科、第8卷、第4號。 2) 青木猛、舌下膿瘍ヲ思ハシメタル舌下腺唾石ノ一例。耳鼻咽喉科、第8卷、第6號。 3) 保坂三郎、急激且ツ重篤ナル症狀ヲ呈シ多數ノ結石ヲ排出セシ唾石症例。耳鼻咽喉科、第10卷、第1號。 4) 北川大四郎、興味アル唾石症二例。耳鼻咽喉科、第10卷、第10號。 5) 高田士、唾石ノ一例。耳鼻咽喉科、第10卷、第11號。 6) 豊田文一、唾石症。耳鼻咽喉科、第10卷、第11號。 7) 池間昌吉、分岐セル唾石症例。耳鼻咽喉科、第10卷、第11號。 8) 宮城亙山、興味アル唾石症例。耳鼻咽喉科、第12卷、第5號。 9) 菅木實、田原昭、唾石症ノ四例。耳鼻咽喉科、第12卷、9號。 10) 青木三弦、唾石。耳鼻咽喉科、第13卷、8號。 11) 村田鷹一、河端一雄、大阪鐵道病院耳鼻咽喉科ニ於ケル過去16年間ニ遭遇セル唾石症ニ就テ。耳鼻咽喉科、第13卷、第9號。 12) 田中半之助、化膿性炎症ヲ伴ヘル舌下腺唾石症例。耳鼻咽喉科、第13卷、第8號。 13) 金丸勇、顎下腺唾石症ノ一例。

耳鼻咽喉科、第13卷、第9號。 14) 水越浩、顎下腺唾石ノ一症例。耳鼻咽喉科、第14卷、第4號。 15) 藤井薫、興味アル唾石五症例。耳鼻咽喉科、第14卷、第4號。 16) 船守曉、唾石自然排出例。耳鼻咽喉科、第14卷、第9號。 17) 牟田哲三郎、唾石ニヨル口腔底及頸部蜂窩織炎例。耳鼻咽喉科、第14卷、第9號。 18) 曲田益雄、顎下腺唾石症。大日本耳鼻會報、第42卷、第1號。 19) 松浦三郎、唾石症ニ就テ。大日本耳鼻會報、第44卷、第5號。 20) 坂田正、唾石ヲ伴ヘルウオールト一氏管膿瘍。大日本耳鼻會報、第45卷、第1號。 21) 王瀛、唾石症ノ三例。大日耳鼻會報、第46卷、第4號。 22) 田中半之助、化膿性炎症ヲ伴ヘル舌下腺唾石症例。大日耳鼻會報、第46卷、第6號。 23) 太田芳樹、唾石症知見補遺。大日齒科醫會誌、第39年、第1號。 24) 深江一、扁桃腺、鼻腔及ビ唾腺ノ結石並ニ其ノ成因ニ就キテ。十全會雜誌、第35卷、第10號。 25) Denker u. Kahler, Handbuch d. Hals-Nasen-u. ohren heilkunde. (1926).